

日中の茶文化と茶産業の発展状況

王 挺・筒井 和美

1. はじめに

茶道は、我々素人にとってやや堅苦しいイメージがあるようだ。中国では、茶道より「茶文化（或いは茶芸）」と呼ばれるのが通常である。この呼称からは、日中両国のお茶の発展方針と環境の違いが分かるだろう。一方、日本のお茶は中国から伝わり現代に至るまで絶えず発展しているが、中国のお茶文化の中心思想（儒・釈・道^{註1}）とは違うのである。また、現代社会において、様々な飲み物が氾濫している厳しい現状の中、お茶が伝統文化の表現として、また同時に飲み物として、どのように引き継がれ、どのように繁栄しうるのかは日中両国にとって共通の課題である。これまで、日中の茶文化の比較や茶道における諸要素などに関する論文^{1~3}はあるが、現代社会における日中茶産業の対比と発展現状に関する報告例は少ない。そこで、本論文では日中両国の茶道の起源や指導思想の対比、発展現状などの分析を通し、今後、日中の茶産業はどのように発展すべきかを提案する。

2. 中日両国の茶文化・茶道の起源

2.1 中国の茶文化の起源

中国では、いつ頃お茶が飲まれ始めたのかは今まで結論が出ていない。しかし、上古時期起源^{註2}、西周起源^{註3}、漢唐^{註4}時代に生まれたなどのいくつかの説があり、茶文化が非常に長い歴史を持っているのは言うまでもない。そして、茶文化が形成されたのは隋唐時代である。唐時代の陸羽は「茶聖」(cha sheng) と呼ばれる。陸羽の『茶経』は、世界で現存する最古かつ包括的なお茶に関する著作である。『茶経』は華麗な農学著作であるばかりではなく、初めて茶文化について述べられた優れた作品である。『茶経』以前、「茶」という漢字はなく、「荼」と書かれた。「荼」は主に薬用の意味として使われる。すなわち、隋唐時代以前、中国のお茶は主に薬として使われていたのである。『茶経』では、日常のお茶を優れた芸術文化の域にまで高めており、中国の茶文化を推進していると言える。茶芸とは茶器や水などがお湯に与える影響を考え、もしくは茶の木の種類、栽培、加工、茶葉の化学的な変化を研究することによってどのように質のいい茶を生産するかを考察する芸術である。唐の時代には、経済や社会の発展とともに、お茶は一般家庭の飲料として徐々に民間に広がってきた。そのような環境で様々な茶の文化の流派が形成された。それぞれの流派は、修行、茶芸、風雅などの異なった境地に沿って発展している。

また、唐時代には、お茶を飲む方法も多様になった。唐時代以前は、茶葉と水を一緒に鍋に入れ、玉ねぎ、生姜、ナツメ、オレンジピール、ハナミズキ、ミントなどを加えて沸騰させた後、

あくを取り除いてスープを飲むという方法であった。このような方式は、お茶の香りを損ないやすいそうだ。そのため、唐時代には沸騰直前まで水を煮沸し、そこへ茶葉を入れ、その後その茶を飲むという新しい作法になった。そして、『茶経』によると茶湯に最適な水は山水であり、次に海水、最後は井の中の水とされている。茶具は磁器が最高で、一番相応しいのは青磁、特に浙江省の「越磁」である。宋時代^{註5)}では茶風が栄え、都市から田舎にわたりお茶を販売する店が現れた。元朝^{註6)}から、「散茶」が徐々に「団茶」、「茶の餅」に取って代わり、乾燥茶煎じなども現れた。このようにお茶は富裕層だけでなく市民層も味わえる一般食品になってきた。

2.2 日本の茶道の起源

お茶が初めて日本に渡来したのは平安時代である。中国に留学していた僧侶の最澄が、お茶の苗を持ち帰ったのが始まりだそうである。806年、空海が中国から石臼を持ち帰った。その後の300年間、お茶は日本でそれほど普及していなかった。しかし、鎌倉時代には栄西禅師をはじめ、多くの禅僧が茶の製造方法と喫茶法を日本に伝えたことによってお茶は発展していった。栄西禅師は中国宋朝の寺の茶風を日本に導入し、1211年に『喫茶養生記』という著作を執筆している。1214年、頭痛に苦しんだ将軍源実朝にお茶を捧げて、病気を治したことをきっかけとして、将軍に『喫茶養生記』を推薦した。それから、お茶は文人と武士階級に普及していった。1241年、聖一国師が中国・宋朝^{註5)}から茶の種を持ち帰り、現在の静岡県足久保にまいたと伝えられている。また、1267年、大応国師が中国式茶道具及び闘茶の方式を日本に持参した⁴⁾。しかし、これは日本の茶道が生まれる前の段階である。

本来の茶道は15世紀の末ごろ村田珠光氏により創立された。村田珠光氏は日本の茶道に思想や魂を注入した初めての人物であり、日本茶道の祖先とも言われる。その後、茶道は武野紹鷗によりさらに推し広められた。日本の茶道の精神も「茶と禅が一体になる」ような境地になった。その後、千利休はより具体的かつ系統的な規則を定め、茶道を庶民化した。日本の茶道は今でも絶えず発展しているが、茶道の基本的な様式を決めたのは千利休である。千利休により、「和敬清寂」が茶道で重んじられる精神になった。江戸時代に千利休の子孫と弟子が茶道を継承し、別の流派が現れた。千家流派は表千家、裏千家と武者小路千家の3つの大きな流派になった。この時期は日本茶道の輝かしい時期であり、日本固有の特徴を持っていた。また抹茶道、煎茶道も形成された。明治維新以来、茶道に大きな変化が現れ文化的な意味が強くなった。そして、時代に応じて自国の特徴を持つようになり、現在の茶道のようになった。

3. 発展状況

3.1 中国のお茶の発展状況

文化は国民の性格を反映すると言われるように、中国の茶文化は中華民族の性格の鏡である。茶を飲むことによって友達になるということは、一般の庶民の間で広く知られている概念である。

中国の茶文化は日本より更に庶民化され、礼儀と形に拘らず、実用性を大切にする。そして、現代社会では、経済のグローバル化とともに、お茶の商業化も盛んに発展してきている。

近年、中国では、茶文化を広めることを基盤として、お茶産業を促進している。お茶の色や加工方法により、「緑茶」、「黄茶」、「白茶」、「青茶」、「紅茶」、「黒茶」という6つの基本的な種類がある。2011年、黄茶以外の5種類のお茶の生産量と生産額は上昇した⁵⁾。楊、李(2013)⁵⁾によれば、2011年中国は世界第一のお茶生産国になった。また、お茶の栽培面積と農業総生産額も世界第一位になった⁵⁾。これまで、中国茶の取引は小売と卸売りを主として、ネット販売が発展しつつある。2011年には中国茶の国内消費は大幅に増加し、国際貿易も上がった。表1のように、2011年の中国の茶畑面積は220.7万ha、2010年より9.7%増えた。お茶生産量は2010年より9.9%、生産額は30.5%増え、また、輸出量も年々増加している。表2のように、2007年から2011年まで輸出量が次第に増えてきた。経済発展への貢献度から言えば、中国のお茶産業は右肩上がりに発展してきている。

表1 2011年及び2010年の中国の茶畑、生産量、生産額の対比

項目	2010年	2011年	増減
中国の茶畑面積(万ヘクタール)	201.2	220.7	9.7%増
お茶の生産量(万トン)	141.3	155.3	9.9%増
お茶の生産額(億円)	3491	4556	30.5%増

(中国農業部種植業管理司⁵⁾による)

表2 2007年～2011年の中国茶の輸出統計

年	輸出量(万トン)	輸出金額(万ドル)	平均単価(ドル・トン)	輸出国量
2007	28.94	60706	2097	—
2008	29.69	68240	2298	—
2009	30.30	70495	2327	110
2010	30.25	78412	2593	—
2011	32.26	96500	2991	120

(中国統計局⁵⁾による)

3.2 中国茶産業の問題

実は、中国の茶産業には五つの問題がある。まずは、茶の品質と安全の問題である。中国の農業はここ数十年の間、農薬を使っている。空気、水、土壌に一定の農薬成分が残っており、残留農薬は茶の木に移る可能性がある。二つ目は、今の中国ではお茶の品質安全に関する法律が少な

いことだ。三つ目は茶畑の管理のことだ。近年、経済の発展を追求するあまり、盲目的に茶畑の規模を拡大する企業が多くなった。こういう現状の裏には、茶の供給過剰や、市場価格が下がるなどの問題も生じる。

四つ目は、茶畑単位面積当たりの収穫量、組織レベルとお茶の標準化程度が低いため、お茶の大手企業が欠如している問題である。中国の茶産業は大部分が 1990 年代から始まったが、実力と規模はまだ十分とは言えない。輸出は低価格に依存するのが多く、創造力が足りないという問題もある。庶民化され、礼儀と形に拘らない現代社会の中国茶文化は、経済の発展と深く結びついてきた。そのため、お茶の商業化がさらに発展するかどうかは中国の茶文化や茶の世界に大きな影響を与えることになる。

最後の問題はお茶情報の偽装である。高級なお茶は値段が高いため、利益を求めあまり、商品の偽った情報を発信されることがある。茶産業全体の商業管理がまだ不足しているのが窺われるのである。

3.3 日本茶商業の発展状況

中国においてお茶が庶民化されたのに対し、日本では、「和敬清寂」を中心に厳しい形式で茶道の活動を行う。それは日本民族の発展と深い関係がある。孤列島という環境の中で形成された日本民族は集団意識が強く、お互いに協力する意識も強い。茶道は集団による活動が多く、連携して平和の雰囲気を作り出すだろう。茶会中、厳格なルールを守り、礼儀を重視する。この点から見れば、日本の茶道は人間に礼儀の教育を行う道徳修養の儀式と言える。伝統文化や人生の知恵を含んでおり、精神性を高める意義を持っている。

1609 年にオランダが長崎県平戸で営業を始め、1610 年に東インド会社が平戸から日本の茶をインドネシア経由でヨーロッパへ輸出したのが日本国最初の輸出といわれ、当時の茶は嬉野の釜入り茶であった⁶⁾。日本茶の輸出はアメリカなどと締結された修好通商条約の締結（1858 年）以降順調に伸びており、1917 年には最高の 30,100 トンの輸出実績がある。そして、日本国内で生産される茶において、緑茶は大きな割合を占めている。図 1 のように、緑茶には普通煎茶、玉露、かぶせ茶、番茶、碾茶、玉緑茶などの種類がある。表 3 より、玉露、かぶせ茶、碾茶は緑茶の高級品で、近年の平均生産量は大体 6000 トンで、また普通煎茶は日本茶種の中に半分以上の割合を占めている。煎茶は茶の若葉を摘んで乾燥し、湯を注ぎ香りや味を煎じ出した緑茶である。

近年、世界でもお茶は健康に非常にいい飲み物としてより多くの人々に受け入れられている。そのため、日本の緑茶輸出量も増えている。

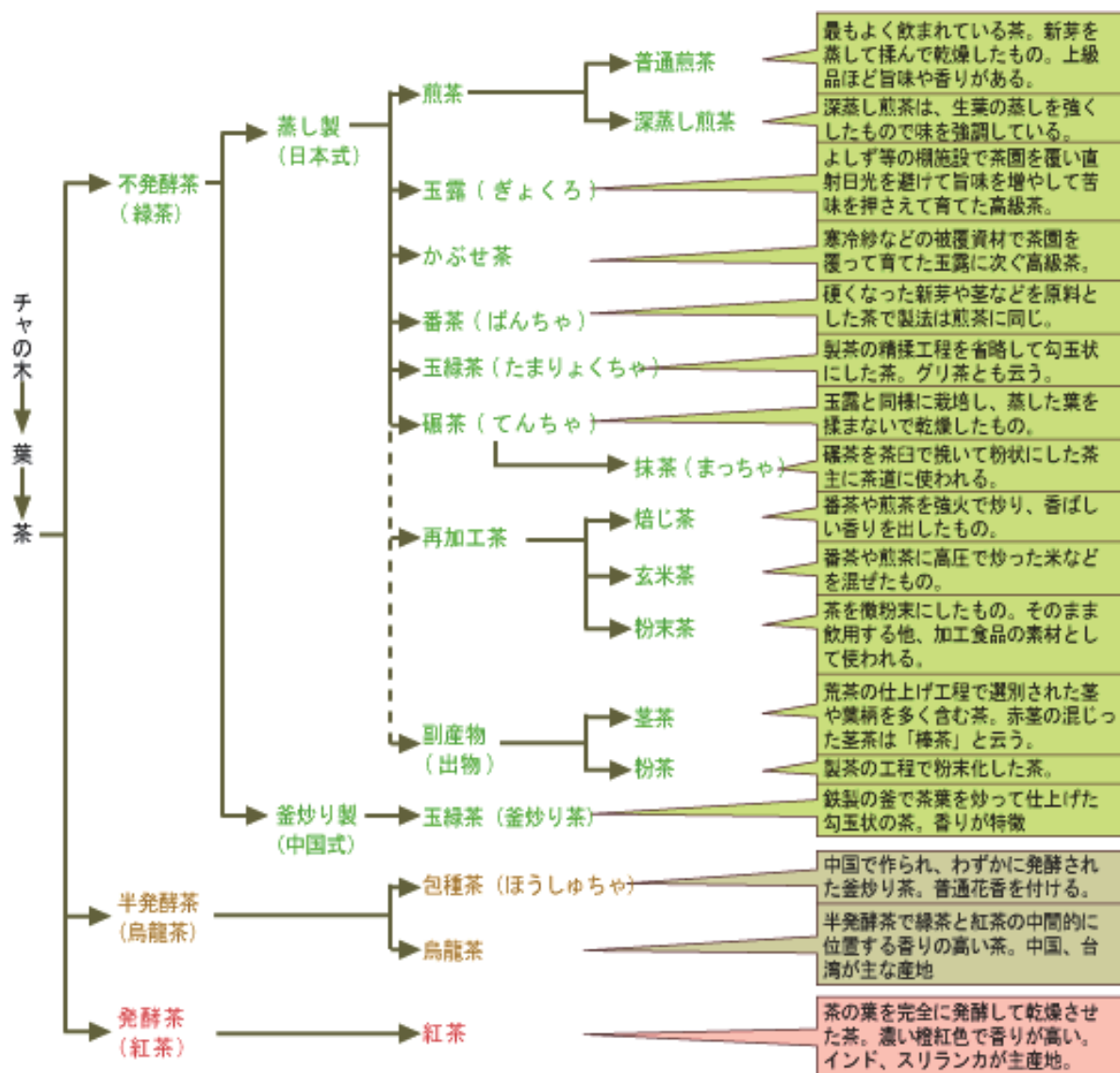


図1 お茶の分類⁶⁾

表3 日本の主産県の茶種別生産量

(単位：t)

収穫年度	合計	玉露・かぶせ茶・碾茶	普通煎茶	玉緑茶	番茶	その他
平成21年	83900	5960	57200	2480	17100	1270
平成22年	83000	5710	53100	2260	20500	1430
平成23年	82100	5840	53400	2200	18700	1890
平成24年	85900	6420	54900	2320	20300	2050
平成25年	82800	5840	52500	2220	20500	1820

(平成25年産茶生産量等(主産県)⁷⁾による)

単位：(t)

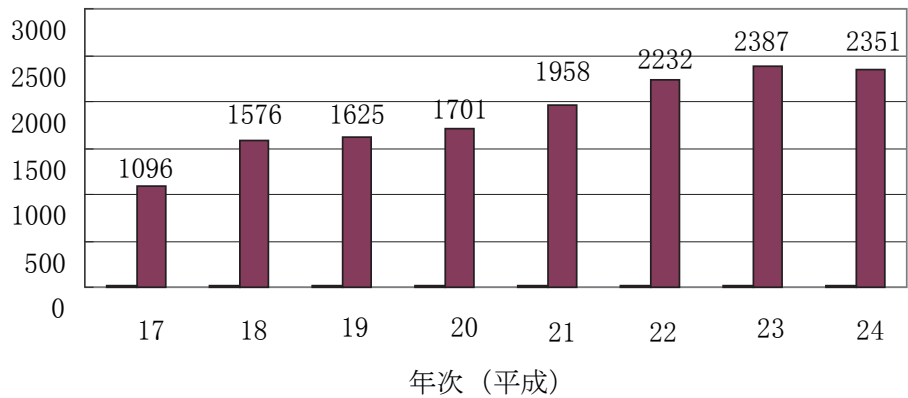


図2 日本緑茶の輸出数量の推移

(平成24年度 食料・農業・農村白書⁸⁾による)

3.4 日本茶産業の問題

近年、日本の茶農業収入は減少傾向にある。この背景には、茶葉の価格が下落しているほか、コーヒーに代表される洋風の嗜好品が一般の生活様式として普及したことが影響しているという指摘もある。茶栽培面積は平成12年(2000)の50,000haから平成24年(2012)の46,000haまで、9%(5,000ha)減少している⁸⁾。欧州への日本茶の輸出量は、残留農薬問題や放射性物質に関わる規制により伸び悩んでいる。図3のように、日本茶の輸出量は相手国によって偏りがあり、今後さらなる輸出拡大を図るには、北米地域以外の有望な市場を開拓することが重要である。

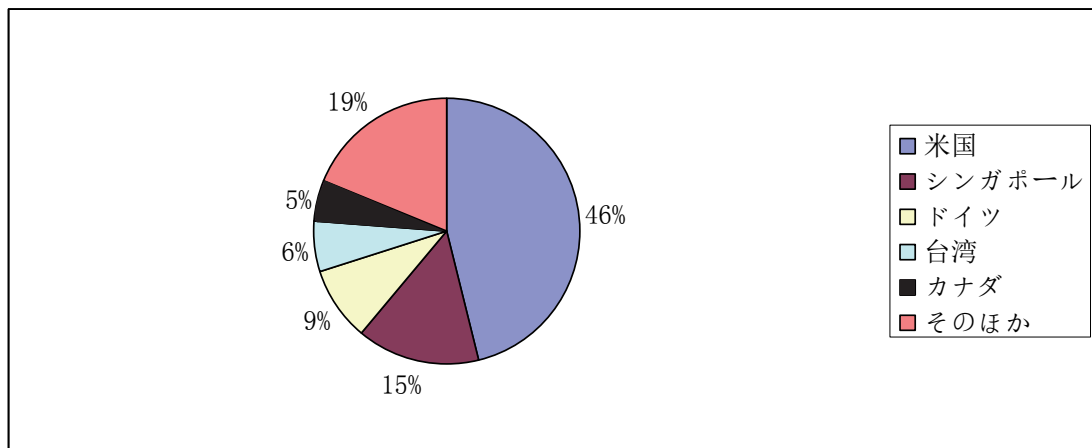


図3 日本茶の輸出額(50.5億円)割合(2012年速報値)

(茶の輸出戦略(参考資料)⁹⁾による)

4. 発展状況に対する考え

茶道の発展と茶産業の発展は、切り離して考えることは出来ない。日中両国の茶産業にとって、今後、「消費者ニーズの把握」、「流通システムの見直し」、「茶加工品の開発」、「新規取引先の開拓」、「ブランド化」など、マーケティングに関する取り組みが必要である。特に、中国にとっては、茶の品質を高めることとブランドを築くことが大事である。図3のように、アメリカは日本茶の輸出相手国の最大であるとともに、中国茶の輸出相手国としても第二番目である⁵⁾。表4のように、中国茶の輸出は日本に比べ低価格のメリットを主としてグローバルマーケットの競争に参加している。しかし、低価格の利点だけでは長期的な発展は見込めない。価格競争だけでなく、茶葉自体の品質や技術向上にも取り組むべきと考える。

一方、日本では、生産者の高齢化、小区画茶園や傾斜地茶園等の理由で茶園の廃園が進行したことから、茶の栽培面積が近年減少しつつある。茶農業生産者の積極性を向上し、海外向けの輸出品への放射性物質などの懸念を払拭し、茶道と茶産業を結び付けることを通して、茶産業は更に盛んになるだろう。

表4 2011年の米国における緑茶輸入

	数量 (t)	数量シェア (%)	金額 (千 USD)	金額シェア (%)	単価 (USD/kg)
中国	13570	69.8	44330	39	3.27
日本	1419	7.3	31164	27	21.96
カナダ	337	1.7	10524	9	31.23

(茶の輸出戦略 (参考資料)⁹⁾ による)

5. 今後の課題

茶文化であっても、茶道であっても、日中両国にとって伝統文化の一つである。時代の流れに応じて、伝統文化と現代社会をよく結びつけるべきだ。経済的にグローバル化しつつある今日、茶道の発展は茶産業と深い関係がある。今後、茶道と茶産業をどのように融合し発展させるのかを検討する。

人類の優れた文化財には国境がない。お茶は日中両国において随分長い歴史を持っていて、絶えず繁栄することは両国にとって共通の課題である。そのため、今後どうやって日中両国間で茶に関する交流を拡大させるかをも検討する。

註

- 1) 儒・釈・道：儒学の道徳的修養、仏教の禅学と中国固有の宗教（道教）の指導思想「天人合一」が中国茶文化に浸透している。
- 2) 上古時期：中国での上古時代は夏朝以前の時代である（夏朝は約紀元前 21 世紀—約紀元前 16 世紀）。
- 3) 西周時代：紀元前 1046 年—前 771 年
- 4) 漢唐時代：漢朝は紀元前 202—220 年、唐朝は 618—907 年
- 5) 宋時代：960 年—1279 年
- 6) 元朝：1271 年—1368 年

参考文献

- 1) 陶 杰：中国と日本の茶文化についての比較研究、愛知学院大学文学部紀要 **37**、169（2007）
- 2) 陸留弟：茶芸と茶道における諸要素：中国茶芸の歴史、文化、習慣、特徴と日本茶道の型・気・美・禅、日本研究 **37**、p.13—53（2008）
- 3) 関剣平：日中茶文化交流時代の到着、世界緑茶協会機関誌 **31**、p.3—7（2012）
- 4) 山崎淳也：『日本茶文化とビジネスの可能性』、平成 20 年度文教大学大学院修士論文（2008）
- 5) 楊江帆、李国榕：『中国茶業発展報告』社会科学文献出版社、p.5—17（2013）
- 6) 全国茶生産団体連合会・全国茶主産府県農協連絡協議会ホームページ
<http://www.zennoh.or.jp/bu/nousan/tea/dekiru01.htm>（検索日：2014 年 1 月 14 日）
- 7) 「平成 25 年産茶生産量等（主産県）」農林水産省（平成 26 年 2 月 13 日公表）
http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/sakkyou_kome/pdf/syukaku_tya_13.pdf
（検索日：2014 年 3 月 13 日）
- 8) 「平成 24 年度 食料・農業・農村白書」農林水産省（平成 25 年 6 月 11 日公表）
http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h24/zenbun.html（検索日：2014 年 2 月 27 日）
- 9) 「茶の輸出戦略（参考資料）」農林水産省（平成 25 年 8 月 29 日公表）
http://www.maff.go.jp/e/export/kikaku/kunibetsu_hinmokubetsu_senryaku.html（検索日：2014 年 2 月 27 日）